神戸新聞文芸

12月入選　エッセー・ノンフィクション

めやみ地蔵

谷エミコ 作

たに・えみこ
50歳・眼科医師
神戸市在住

今年の春、京都の繁華街、四条通を歩いていた時、仲源寺の「めやみ地蔵」に出会った。そもそもは、安貞二年（1228年）に鴨川が氾濫した際、地蔵菩薩を安置し、「雨やみ」地蔵と名付けたのが起こりらしい。当初は四条橋のところにあったものが、天正十三年（1585年）に南蛮園の現在地に移された。いつしか「雨やみ」が転じて「めやみ（目疾み）」地蔵と呼ばれるようになり、眼病祈願のため信仰されるようになったそうである。

めやみ、というのは聞き慣れない言葉であったが、夏、所属している混声合唱団のコンサートで歌った歌の中にこの言葉が出て来た。「十びきのねずみ」という歌で、作詞は谷川俊太郎さん、作曲は吉岡弘之さんである。ロックンロールのリズムに乗ったことば遊びの歌で、リズムの楽しさとことばの楽しさとが見事にマッチしている。ねずみの出身地はおつみ、さがみ、つるみ、ふしみ、あつみ、いたみ…とずべて「み」で終わる。そして、「ふしみのねずみ」は、「めやみになやみ」と韻律を踏んだ歌詞が続く。歌いながら、めやみ地蔵の姿を思い出していた。

さて、目の病名にもことば遊びみたいなものがいくつかある。その代表的なものは「めばちこ」だ。語源については、「メ（目）十ハチ（にじき）十コ（接尾辞）」に由来するという説や「目をパチパチする」ことに由来するという説等があるらしい。子供から大人まで、昔から関西人は、まぶたに現れた出来物を「めばちこ」と言う。私も、生まれ育ちが関西なので、眼科医師になるまで、めばちこは全国共通の病名だと思っていた。ある日、眼科雑誌のコラムで、「ものもらいにはいろんな言い方があり、関西ではめばちこというらしい」という記載があり、えっと驚いた。実際周囲の友人に聞いてみても、めばちこが全国共通の言い方だと思っている人がほとんどであった。しかし、広辞苑で「めばちこ」をひいても出てこない。「ものもらい」をひくと「麦粒腫の俗称」とちゃんと載っている。

全国方言一覧辞典を調べてみると、確かにものもらいの項目には、北海道から沖縄までさまざまな言い方が並んでいた。大阪、兵庫、奈良の関西圏では「めばちこ」と言っている。その他、例えば東北では「めっぱ」「ほいと」「ばが」、北陸では「めもらい」、長野では「めこじき」、関東では「ものもらい」、四国では「めぼ」「めいぼ」などとあった。さまざまな言い方の中でも、和歌山の「でばつく」、福岡の「おひめさん」、佐賀の「ないます」、熊本の「いんのくそ」、鹿児島の「いんもれ」などは、その語源が想像もつかない。こんなに個性的な言い方があふれている病名は、ものもらいを置いて他にはなさそうである。

先日、上まぶたの中に固いしこりのようなものがあり、と、めばちこが出来たみたいだと受診された患者さんがいらした。実は、これは厳密にはめばちこではない。

まぶたに出来る出来物には「麦粒腫」と「霰粒腫」の二種類がある。めばちことは、一般には前者の麦粒腫のことで、まつ毛の付け根にある脂腺に細菌が感染して化膿し、赤く腫れて痛む。これに対し、霰粒腫は、まぶたの組織の中の「瞼板」という部分の中に徐々に形成された球状の固まりで、赤みも痛みもない。この患者さんに出来ていたのは後者の方であった。

そこで、「正確な病名は霰粒腫というのです。」と話したところ、「どんな字をかくのですか。」と聞かれた。「サンは、雨冠に散る、リュウは、粒で、シュは、腫瘤とか腫瘍の腫です。」とお答えしたところ、「ああ、あられの粒なのですね。」と納得された。そう、「霰」は「あられ」とも読むのだ。辞書を引いてみると、霰とは、「水蒸気が氷の粒になって降ってくるもの。雪と霙との中間の状態のもの。」とある。

松尾芭蕉は、石山寺を参拝した際に、「石山の石にたばしる霰かな」という名句を残している。寺の境内に雄大に隆起した硅灰石の上に、霰の粒がとびはねる情景はとても躍動的で、ぱらぱらと音が聞こえてきそうである。まぶたの出来物は、大きさといい、形といい、まさにこの霰の粒のようなものだ。「霰粒腫」と名付けた先人はなんと風流なのだろうと感心してしまった。

印象的な命名と言えば、「あおそこひ」。緑内障の別名であるが、古代ギリシャのヒポクラテスが「アフォリズム（金言）」の中で、「目が地中海の海の色のように青くなり、やがて失明状態になる」と記述しているところに由来している。緑内障は視神経の障害で、進行すると光に対する反応が鈍くなり、瞳が散大気味になる。また、眼圧が上昇するため角膜がやや混濁する。このためメラニン色素が少ない青い目の西洋人では、目が地中海の海の色のように見えたのであろうが、日本人は色素が多いので青くなるということはない。魅力的な名前ではあるが、緑内障は失明につながる怖い病気なので進行しないうちに検診や人間ドックで早期発見することが大切である。

最近、その名の由来について考え込んでしまった疾患に「匐行性角膜潰瘍」がある。これは、角膜のキズに細菌が感染して起こる。かつては、農作業時に稲や麦の穂や葉で目を突いた時によく起こり、代表的な菌は肺炎球菌であった。最近では、「緑膿菌」の感染によるものが半数以上を占め、原因としてソフトコンタクトレンズによる角膜障害がよく見られる。緑膿菌は、感染すると、角膜深くに菌が入り込み、重症の角膜潰瘍を発症させてしまう。ごく平年の間に、匐行性角膜潰瘍の患者さんは三人来院された。一人目は、ワンデータイプのコンタクトレンズを装着したまま眠ってしまったため起こった。二人目は、二週間での使い捨てレンズを使っていた。三人目は、木の枝で目を突いてしまった人であった。いずれも緑膿菌の感染で、点眼だけでなく、点滴による治療が必要になった。

肺炎球菌や緑膿菌による角膜潰瘍が「匐行性」と言われるのは、潰瘍の場所が「這うように移動するからだと教科書にはあるのだが、「匐行性」などという言葉は日常聞かない。「匐」という字は、「匍匐前進」という言葉でかろうじて知っていた。

「匍」も「匐」も漢字の意味ははっきりしないになって進む様子を表してる。広辞苑を引いてみると、「匍行」という言葉は「土壌がわずかずつ斜面の下方へ移動すること」とあるが、「匐行」は、載っていない。両者が混同され誤って匐行性と名付けられてしまったのかもしれないと疑ってしまう。真相は謎のままである。いずれにせよ、気をつけなければならない重症の細菌感染症である。三人の治療を行いながら、心の中でめやみ地蔵に、「無事に治癒しますように」と祈っていた。

さて、めやみ、の中でも、ものもらいや角膜潰瘍のように明らかにわかる病気とは異なり、一見してどこにも異常がみられないのに、視力が落ちてしまう病気がある。「心因性視力障害」というものである。小学校低学年のころは確かに両目とも視力はよかったのに、十歳くらいになって突然「見えない」と言い出してしまう。視野が狭くなる場合や色覚に異常が出る場合もある。進級して新しい学年での生活が始まったころ、そんな子供たちが必ず何人か眼科にやってくる。原因は、家族での親子関係や、学校生活での友達関係などにおけるストレス、とされている。担任の先生や親御さんが丁寧に見守って本人の心の中の思いをゆっくり聞いてあげることで、時間をかけて回復することも多い。

もう五年前のことになるが、学校保健の仕事で福岡での学会に参加した折、「帰ってきたヨッパライ」を大ヒットさせたフォーククルセダースの北山修さん（九州大学大学院人間環境学研究院教授）の「日本文化の中の人間関係」という講演を拝聴した。優美な浮世絵に描かれた母子の姿を十点近く鑑賞させていただいたが、どれもがぴたっと体を寄り添わせた母子密着状態である。何気ない対象物を一緒にながめながら、お母さんが優しく話しかけている証拠画像が、浮世絵には残っていた。お母さんが話しかけ、子供の言葉を引き出し、子供の話を聞いてやる、そんな当たり前のようなやりとりが実はとても大切なことなのだ。北山さんによると、心の奥にたまった抑圧されたものを言葉で表出、表現することでカタルシス効果（浄化の効果）を得ることが出来る。言葉以外にも、音楽や絵、スポーツや踊りなどによって浄化することで「心の便秘」を解消することができる。逆に、十分に自分を表現できないで、何かを心にためこんだまま成長すると、後で症状が身体化されやすい。十歳前後になって急に「目が見えにくい」と訴える現象を証明するひとつの手がかりになるかもしれない。

最近、新聞記事で、「授乳の際に赤ちゃんの顔ではなく携帯電話の画面を見つめてメールを打つことに熱中している母親たち」の話を読んだ。また、先日こどもの心の問題についての講演会を聴いた際、「電子ベビーシッターに育てられた世代が子育てをはじめた」などと話されていた。めやみ地蔵の見てきた親子像は、現代までさまざまに変化してきたであろうが、少子化やネット社会などにより、特にここ三十年の子育ての変貌は大きいに違いない。改めて浮世絵の母子の姿が思い起こされた。あのようにゆったりとしたコミュニケーションのひとときを大切にしてほしい。

そんなことなどいろいろ思い、めやみ地蔵の大きな玉眼が穏やかに見守ってくれているのを感じながら、毎日仕事をしている。

きらり　きらり　納　健

神戸新聞文芸募集

募集作品＝小説は400字詰め原稿用紙10枚、エッセー・ノンフィクションは10枚または3枚。未発表の自作に限り、他紙・誌との二重投稿は不可。作品は返却しません▽資格＝兵庫県に在住、在勤、在学か、県内に発行所を持つ同人誌の同人▽締め切り＝3月25日必着▽賞＝小説とエッセー10枚は2万円、エッセー3枚は1万円▽選者＝島京子、竹内和夫の両作家▽応募方法＝作品に住所、氏名（ふりがな）、年齢、職業、電話番号、応募部門を明記し、〒650－8571　神戸新聞社文化生活部「神戸新聞文芸」係（☎078・362・7044）へ。